JVC Japan International Volunteer Center

323 | 2016 秋

［￥500］年4回発行

TRIAL & ERROR

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

［特集］イラク戦争がもたらしたもの

イラク戦争は共存の社会を壊し憎悪を生み続けている

［報告］足元から世界とつながろう

いなかで学んだ国際協力の実践

［報告］インターネットで世界に発信しよう

多国籍ボランティアが作った新しい英語ウェブサイト

過激派組織「イスラム国」との紛争の影響により、多くの子どもが親や知人を殺害された。その記憶から戦車や兵士の絵を描きがちだったが、イラク現地NPOが主催したワークショップで、国内避難民の男の子たちは平和的な絵を描いていた。

イラク戦争は共存の社会を壊し憎悪を生み続けている

結局存在しなかった「大量破壊兵器」の捜索を理由に2003年に始まったイラク戦争は、各地の街の徹底破壊と虐殺を招いた。かつてイスラム教スンニ派とシーア派が共存していた社会では、米英軍がスンニ派を「サダム・フセイン支持層」として攻撃対象にしたり、シーア派が新政権を担うことで反米・反シーア派を掲げるISが誕生したりと、二つの宗派は対立の構図に置かれている。加えて、肉親を殺された子どもは心に深い傷を負っている。それはアメリカとともに戦争のできる国になった日本が今後つくり出す姿かもしれない。

平和だったイラクを知らない子どもたち

イラク事業担当　池田 未樹

かつてイラクには、イスラム教スンニ派もシーア派もクルド人もその違いを超えて共存する社会があった。だが2003年からのイラク戦争は、宗派や民族の違いでの憎しみを生み出し、戦争の犠牲者である360万人もの国内避難民と、それに反感を抱く住民をも増やしている。このままでは将来、平和や共存を知らない子どもがイラクを担うことになる。今必要な行動を探りたい。

誤解と偏見を受けるイスラム教

2016年7月3日。イラクの首都バグダッドの、イスラム教シーア派が多数を占める商業地区カラダで自爆攻撃が発生し、イスラム教の断食月（ラマダン）明けの祝祭で集まっていた多くの礼拝者が犠牲となりました。イラク保健省は死者が292人に達したと発表し、03年のイラク戦争以降、あらゆる爆弾攻撃のなかでも最多の死者数を記録してしまいました。

この他にも、バングラデシュ、アフガニスタン、パレスチナなど世界で起こる悲劇的で衝撃的な暴力事件、自爆・爆破事件を受け、日本ではイスラムへの偏見が高まっていると感じます。イラクの活動について講演した際、「彼らは暴力的。自分たちがその愚かさに気付くまで、戦わせておくべきだ。日本人は介入しなくていい」との意見を言う方もいます。

INSANのワークショップでは、精神科医がアクティビティを通じで精神的に問題を抱える子どもを見つけ出す。どのスタッフもすべての子どもの性格や背景を把握しようと努めている。

この事件の後、多くのイラク人は「本当のムスリム（イスラム教徒）は平和を望み、暴力を望んでいない。このような行為をする人たちはムスリムではない」と主張しました。しかしこの声はニュースにはならず、日本の私たちの耳にも入りません。

崩壊しつつあるイラク社会

イラクでは、以前はシーア派とスンニ派の対立については政治的な文脈で語られることが多く、事件やテロなどがあっても宗派間に基づく強い対立は民間レベルではありませんでした。しかし、最近ではこの対立が民間レベルにまで落ちてきているようです。イラク戦争以前の、シーア派とスンニ派が互いに助け合って築き上げてきたイラク社会そのものが明らかに崩壊しようとしています。

そのきっかけとして、14年6月の過激派組織「IS」（以下、IS）の登場があります。

周知の通り、ISが広大な支配地域を手に入れた背景には、スンニ派住民のシーア派に対する強い不満がありました。フセイン政権崩壊後、シーア派主導で国家再建が進められ、スンニ派は冷遇されてきました（イラク人口構成はシーア派6割、スンニ派2割、クルド人2割）。

反シーア派を鮮明にしているISは残虐な集団であり、シーア派住民からは、それを生んだのがスンニ派と捉えられています。バグダッドでは、このようなシーア派哲学（ISを産んだのはスンニ派であり、シーア派はスンニ派を攻撃すべきだなどとするもの）が公共教育の場で語られ始め、学校で宗派を聞かれることもあるそうです。

赤ちゃんの命名に際しても、シーア派の名前だ、いや、スンニ派の名前にすべきだで親族や友人たちが言い争いになったり、イラク第2の都市でISの本拠地であるモスルから逃げてきたスンニ派女性に対し「何故ISから逃げてきたのか（スンニ派がISを産んだ以上は自分たちで

決着をつけ、逃げて来るべきではない。死んでもよい）」という言葉を投げたりと、民間レベルでの強い対立が鮮明になってきました。

またイラク政府は、IS掃討作戦という名目での攻撃に乗じて、IS戦闘員ではないスンニ派への締め付けや攻撃を同時に行なっているのも現状です。

一般住民と国内避難民との対立

イラクではISなどによる戦闘で国内に避難しているイラク人は300万人以上になります。国内避難民（以下IDP）を受け入れている都市では、上記のような対立に加え新たな対立の構造――IDPと受け入れのコミュニティとの対立――が生じています。

私たちの現地パートナー団体INSAN（Iraqi Society for relief & development。救援と開発のためのイラク人協会）の活動地キルクール県のキルクーク市でも、IDP約50万人が押し寄せました。県では、IDPが14の行政区画と3つの避難民キャンプ（khalw baziyani キャンプ1500世帯、khalw baziyani2キャンプ1685世帯、yahiyawaキャンプ400世帯）に分かれて居住しています。

キルクーク市内、市の中心にはシタデル（城壁）がみえる

最もIDPが多いキルクーク市には約7万3000世帯が滞在し、キャンプに入れず身寄りのないIDPは未完成の建物で生活しています。市はIDPにバスでの帰還を勧めていますが、帰還先の安全は保証されていません。IDPの流入に伴い、家賃や交通費を含む物価が高騰し、労働賃金が低下し、病院で医薬品が不足したことから、受け入れコミュニティにはIDPに反感を抱く人もいます。

さらにIDPを装い市内に侵入する戦闘員への治安上の強い警戒感や、IDPの生活の長期化などから、IDPと住民との間に新たな対立構造が生まれてしまいました。

この緊張緩和のため、JVCはINSANと協力し、避難民・地元住民の子どもたちを対象に、アートや演劇の手法を取り入れながら平和や共存をテーマにしたワークショップを実施し、心理学の専門家やソーシャルワーカーが、紛争の影響で心に傷を負った子どものケアにも当たりました。

大切なのは子どもが笑うこと

「アハラン ワ サハラン（ようこそ）！」

ワークショップのために集まった子どもたちによる熱狂的な歓迎は、しばらくやみませんでした。

16年2月、私たちはINSANの事務所で実施された、平和や共存をテーマにした子どもたちを対象の

ワークショップで、互いの民族の歌と歌う子どもたち。
子どもたちにとって生まれて初めての体験だ。

INSANで開催された平和や共存をテーマにした、子どもたち対象のワークショップに参加した国内避難民の女の子たち

ワークショップのモニタリングを実施しました。

通りからは事務所の入り口はわかりません。INSANは地域住民の共存につながる活動を行なっていますが、住民のなかには反対する人もいるからです。もともとこの地域がもつ民族や宗派間の緊張関係が高いことがわかります。

ここにいる子どもたちは、両親や家族が殺害されたなどの影響で精神に問題を抱えています。目の焦点が定まらず、席に落ち着いて座れない傾向もあります。自由工作では、タバコと箱で戦車を作ったりします。それだけ心に刻まれた戦争の影響は大きいのです。

ワークショップでは子どもたちが「他の民族の歌」を歌うアクティビティを実施しています。多くの子どもは、他の民族の歌を歌ったことがありません。それを聞いた親はとてもビックリしますが、「他の民族の子どもと話せるようになってよかった」という前向きなコメントも聞かれます。このように、子どもへのアクティビティを通じて、共存の意識を両親や地域につなげ、対立を緩和することがワークショップの目的です。

ここでは、精神科医やファシリテーターが一人一人の子どもの名前、性格、出身地などをよく覚えていて、しっかり観察していたことが印象的でした。精神科医はアクティビティや会話を通じ、精神的に大変な子どもを見つけだし簡単な処方を実施します。

例えば、ファルージャから来た子どもには「ファルージャ＝IS＝恐怖」という公式、概念が確立されていて、ファルージャという名前が彼らに恐怖を呼び覚まし状況を悪化させます。

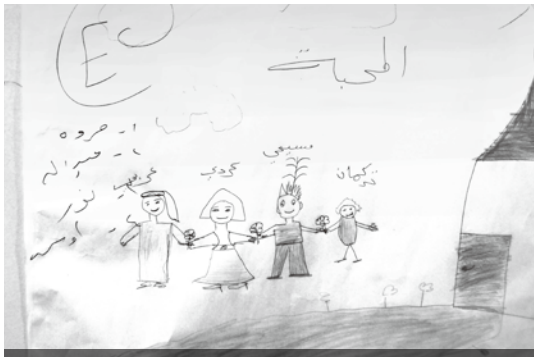
そんな子どもに、ケバブが美味しい、大きな店も多い、自然が豊か、近所の人が優しいなど、ファルージャの違う側面を思い出させることで、安らぎをつくり出し、傷を癒す効果をもたらすのです。なにより大切なのは、子どもたちが笑うことにほかなりません。

宗派や民族が共存していたイラクに戻るために

現地での聞き取りで多くの人は、「昔はイラクは宗派や民族を超えて共存していた」と答えました。INSAN代表のアリーさんのお母さんは「若い頃は、キリスト教徒、スンニ、シーア関係なくミニスカートをはいて、夜ダンスをしたんだよ」と教えてくれました。

「平和をつくる」という言葉がありますが、イラクでは「つくる」よりも「取り戻す」というのが正確でしょう。しかし新しい世代の子どもは、民族が共存していた頃のイラクを知りません。そのような彼らが将来この国を担うことにとても不安を覚えます。

これ以上、混乱が長期化し、当時のことを知らない子どもばかりでイラクが構成されないようにすることが必要です。一見遠回りでも一番近道な方法かもしれませんが、INSANの活動を支え、日本にも発信することが大切です。



絵画のアクティビティで子どもたちが書いた絵。アラブ、クルド、アッシリア、トルコマンが共存している様子を描いている。

明らかになった初めから攻撃ありきのイラク戦争

ジャーナリスト　志葉　玲

今年7月、イラク戦争へのイギリスの関与を検証する「イラク戦争調査委員会」が報告書を公表。アメリカ追従で参戦したブレア政権の責任を厳しく追及している。イラク戦争は360万人もの国内避難民を生み出し、国内はいまだに混乱している。それは、今後アメリカの戦争に追従する日本が生み出す現実かもしれないのだ。

イラク戦争への参戦に法的根拠はない

「イラクへの軍事行動は、最後の手段ではなかった」

「軍事行動に法的根拠があるとは到底言い難い」

今年7月6日、イラク戦争へのイギリスの関与を検証する「イラク戦争調査委員会」が報告書を公表。ジョン・チルコット委員長は冒頭のように、参戦したブレア政権の判断を厳しく追及した。

開戦の口実とされた「イラクの大量破壊兵器情報」のいい加減さも「対イラク政策が不完全な情報と分析に基づき策定されたことは明らかで、こうした情報は精査されるべき」と指摘。さらに、参戦の背景にあった「特別な関係」とされる米英関係について、「国益や判断が異なる部分で無条件の支持を必要とするものではない」と強調し、米英の軍事協力についても一石を投じる内容となった。

同委員会の立ち上げは2009年。トニー・ブレア元首相を含む、当時の政権中枢や外務省、国防省の官僚など政府要人からの公聴会、関連の政府公文書を機密解除し公開するなど、徹底検証を行った。だが、外交面でデリケートな情報の公開を米英両政府が懸念。実に7年越しの公表となった。

最初から米英の攻撃ありきの姿勢だった

報告書は、『ハリー・ポッター』シリーズ全11巻の約2・6倍と膨大。12年末にA4用紙4枚の概要のみを公開した日本の外務省とは雲泥の差だ。各国メディアが最も注目したのは、03年3月の開戦に至るまでのジョージ・ブッシュ米大統領とのやりとりで、ブレア側の一連の文書が公開されたことだ。

それによれば、01年12月、ブレアはブッシュにサダム・フセイン政権を崩壊させることを示唆。02年7月には、「何があっても、私（ブレア）は貴方（ブッシュ）と共にある」と書いている。さらに、「我々に危険なのは、フセイン側の交渉に引きずられること」「イラク攻撃の時期は来年（03年）1月か2月だろう」とも書いている。

つまり、査察受け入れなどのイラク側の譲歩や、戦争回避を目指す国際社会の努力をよそに、両首脳は最初から攻撃ありきの姿勢であったことが伺い知れる。

さらに、米軍のイラクでのあまりに非人道的な軍事作戦や占領統治の杜撰さにイギリス側も振り回されていた様子も伺い知ることができる。例えば、04年4月、ブレアはブッシュへの書簡で、「ファルージャの状況を極めて憂慮している」と述べているのだ。

イラク西部の都市ファルージャは、米軍の徹底的な破壊と虐殺がくり返された「悲劇の地」だ。ブレア側は、イスラム教シーア派、同スンニ派、クルド人といったイラク三大勢力のうち、米軍攻撃で、シーア派とスンニ派が関係悪化しないかを懸

キルクーク市の難民キャンプで暮らす人たちの生活状況を調査するINSANのスタッフ

念した。米軍はシーア派を「フセイン政権による犠牲者」、スンニ派を「フセイン支持層」と色分けたことで、スンニ派に「フセイン政権の残党狩り」「反米武装勢力の掃討」などの激しい軍事作戦を展開したからだ。ファルージャはスンニ派が直面する危機を象徴する都市だった。

イギリス側は、宗派間対立の激化は、イラクで民主的な選挙を行い、新たな政権をつくる復興プロセスの大きな障害になると懸念。果たして06年、イラクでの宗派間対立は「内戦状態」と言えるまでに深刻なものとなり、後にIS(いわゆる「イスラム国」)が台頭する大きな要因ともなった。

緊急支援のアセスメントをするINSANスタッフ

同じ轍を踏まないため、日本でできること

こうしたイラク戦争による混乱は開戦前に予見されたことだった。報告書の公表に伴う会見で、チルコット委員長は「内紛や地域の不安定化、アルカイダの活動のリスクは、侵攻前にはっきりと確認されていた」「英国政府は戦争準備の段階で、イラクを安定化し、管理し、再建する仕事の大きさや、英国にふりかかる責任の重さを考慮し損ねた」とブレア氏ら当時政権を厳しく批判したのだ。

アメリカの戦争に追従した挙げ句、アメリカに振り回され、危惧されたリスクに直面する。イラク戦争でのイギリスの状況は、安保法制でアメリカの戦争にこれまで以上に加担しようとする日本の未来の姿だとも言える。

今年5月末、超党派の国会議員や学識経験者、反戦運動家やNGOなどの関係者により、イラク戦争公聴会が立ち上げられた。JVCの谷山博史代表理事や筆者も参画している。公聴会では、イギリスでの検証からも学びつつ、今後も大量破壊兵器情報や国際法や国際人道法などでの問題、自衛隊イラク派遣などについて追及したい。こうした検証が、安保法制や改憲の流れを止めていく上で、重要な対抗手段であることを筆者は確信している。

何より360万人もの人々が国内避難民であるなど、今なおイラク戦争は過去のものではなく、ここまでの破壊と混乱をもたらした戦争を検証することは、日本を含め、この戦争に加担した国々の責務なのである。

いまさら聞けないQ&A Vol.07

読者のみなさんからの 質問募集中!! 会員担当:宮西までお寄せください。

会員とマンスリー募金の制度的な違いまとめ

	会員 正会員	会員 賛助会員	マンスリー募金
総会に出席	○	○	―
総会での議決権	○	―	―
税制優遇の対象	―	―	○
会費／寄付金の金額	固定 一般:1万円／年	固定 一般:1万円／年	任意 500円～／月
送付物	T&E本誌 年次報告書	T&E本誌 年次報告書	年次報告書 簡易レポート

Q 「JVC会員」と「JVCマンスリー募金」って何が違うんですか?

A 会員は、JVCの「応援団」。その7割が会員を10年以上継続してくれています。マンスリー募金は、毎月定額の寄付の仕組み。税額控除が受けられます。

1980年2月に設立されたJVCは、その3年後、1983年10月より会員制度を導入いたしました。会員数は、翌年度(1984年度)にはすでに700名以上となっていたようです。現在は、1,000名を超える方に会員として支えていただいています。

さて、あらためて「会員」とは何でしょうか?ひとことで表すならば、「“JVC”という団体を支える応援団」でJVC組織の一員とも言えます。JVCの定款では、「この法人の目的に賛同」または「この法人の事業を賛助」する個人または団体となっています。皆さんご存知のとおり、会員の種類には正会員と賛助会員があり、定款では「正会員をもって特定非営利活動促進法における社員とする。」と定義づけられています。JVCは1999年から特定非営利活動法人(以下、NPO法人)となりましたが、特定非営利活動促進法では、その申請要件として「当該申請に係る特定非営利活動法人が十人以上の社員を有するものであること。」としています。つまり、正会員はJVCの最高意思決定機関である会員総会で議決権を持つだけでなく、JVCがNPO法人であるために必要な社員でもあるのです。

会員には、会報誌『Trial&Error』(500円で販売もしています)の送付やイベント参加費の割引といった特典があります。「会費は確定申告すると税金の控除対象となりますか?」という質問をよく受けるのですが、答えは「NO」です。JVCは東京都から認定を受けている認定NPO法人であり、そこへの「寄付(対価性のないもの)」は税額控除の対象となります。ですが、この「認定」の制度上においては、前述のような特典は「(会費に対する)対価」とみなされるため、会費は寄付としては扱うことができません。よって、税制優遇の対象とはならないのです。

一方で、「JVCマンスリー募金」(以下、マンスリー募金)は2000年より実施している、自動引落などで毎月定額をご支援いただく「寄付システム」で、現在ではその登録者は2,000名を超えています。マンスリー募金を通した寄付は、JVC各国での活動、もしくは指定した特定地域での活動に充てられるもので、こちらは「寄付」となるため、税制優遇の対象となります。

以上が制度面における会員とマンスリー募金との違いです。では、ほかにどんな違いがあるでしょうか。マンスリー募金にご登録いただいている方は、実は圧倒的に女性が多く、6割を超えています。ところが、会員になると、男女比率は半々になります。JVCの場合、男性の支援者の方は「会員」を選択していることになります。この理由は明らかになっておりません。ぜひ、男性会員の皆さんに「会員」を選んでいただいた理由をお知らせいただけたら嬉しいです!

もうひとつ、JVC会員に大きな特徴があります。それは「JVC会員は、古くからの支援者」ということです。実は、約35%の方が会員歴20年以上!約70%が会員歴10年以上なのです。冒頭で会員を「応援団」と表現しました。JVCを理解し、JVCを叱咤激励してくださる会員の存在は、まさに「応援団」そのものです。私たちは、1,000名以上の「応援団」に支えられていることを誇りに思います。

(会員・支援者担当　宮西 有紀)

スタッフの
ひとりごと

思わず「手」が出る

スーダン事務所現地代表　今井 高樹

イラスト　かじの倫子

以前どこかで読んだのだが、世界人口の3分の1はフォークやスプーンで食事をし、3分の1は箸、残り3分の1は手で食べているという。大雑把な数字だが、なんとなく理解できる。箸が3分の1にもなるのは中国の巨大人口があるからだろう。

ここアフリカでは「手」が主流。アラブ圏の影響が強いスーダンも、やはり手で食べる。私も現地スタッフと一緒の食事では手を使う。「素朴」で「原始的」な食べ方に思えるが、そうではない。ひとつの文化だし、それに手で食べるのは思うほど簡単ではないのだ。

スーダンの家庭料理では、ソルガム（イネ科の穀物）の粉をお湯で練りあげた「アシーダ」に、シチューをかける。指先でマッシュポテトのようなアシーダをつまみ、シチューをからめて口に運ぶのだが、これがなかなか難しく、ポロポロこぼれてしまうのだ。スーダンの人たちは指先でクルッと丸く固めながら取るのだが、私は少しずつしか取れない。

「なんだ、どうしてもっと取らないんだ？ 口に合わないのか？」食事に招待されると、よくそう言われる。もちろんそうではないのだが、それではと無理にたくさん取ると、今度は服の上にこぼれて、「あーあ、なにをやってるんだ」と笑われてしまう。日本人が箸の持ち方を気にするように、手で食べるにも、正しいやり方があるのだ。

さっぱりうまくならない私も、手で食べる習慣だけは確実に身に着けたらしい。一時帰国時に日本のレストランに入り、おいしい料理に夢中になっていると、時おり箸があるのも忘れて右手が出てくる。いかんいかん、ここは日本だっけ…

コネタにゅーす　活動地雑学

帆布がつなぐ縁

気仙沼事業担当　横山 和夫

東日本大震災による甚大な被害から立ち直ろうとしている宮城県気仙沼市の状況をより多くの人に知っていただくために、JVCでは2012年から気仙沼で作られているいくつかの商品の販売をしています。そのうちのひとつが、GANBAARE（ガンバーレ）の帆布製品です。

昔から気仙沼には漁業や水産加工で使われる前掛けやシートを作る縫製業者が多数あり、業種や作業に合った様々な製品を作っていましたが、震災による津波で多くの仕事場が流されてしまいました。その後、職場を失った職人さんが自らの技術で気仙沼のために何かできないかと集まり、2011年6月に小さな工房から事業をスタートさせたのがGANBAARE株式会社です。GANBAAREの帆布製品は、デザインから縫製まで、すべてが職人さんたちの手づくりです。そのかわいらしいデザインに魅力を感じた気仙沼事務所のスタッフが直接お店に伺い、お取り扱いさせていただくことになりました。

ホヤぼーやとふかひれちゃん柄の小銭入れ

以来、4年が経過した現在でも、気仙沼市の観光キャラクター「海の子ホヤぼーや」や、GANBAAREオリジナルキャラクター「ふかひれちゃん」が描かれたGANBAAREの帆布製品は、JVCのイベント物販での定番商品となっています。

カフェ「おちゃのじかん」の前で、イベントの最後に参加者全員で記念撮影。緑豊かな穴山町の自然の中で二日間を過ごし、参加者同士で様々な話をして盛り上がり、楽しく濃い時間を過ごせました。皆さんいい笑顔です。

［報告］足元から世界とつながろう

いなかで学んだ国際協力の実践

7月30日と31日、山梨県韮崎市穴山町でJVCの交流イベント「JVCと出会う週末」が開催された。JVCや国際協力に関心ある人たちに、国際協力への関わり方を考えてもらうのが目的で、今回のテーマは「カフェといなかと国際協力」。中心からではなく「いなか」という周辺からでも世界の様々な問題を変えていこうと訴えるものだ。イベントの二日間を紹介する。

2016年度広報インターン
西川 芳枝

「いなか」で国際協力を考える

「国際協力に関わる」と一言でいってもその関わり方は様々。私は16年度の広報インターンをしながら、自分にできることを探している最中です。

その一つとして、7月30日・31日に穴山町で行われた交流イベント「JVCと出会う週末」の第一弾に参加してきました。これは、JVCや国際協力に関心ある人に、JVCの魅力を知っていただき国際協力への関わり方を考えてもらう新しい試みで、今回のテーマは「カフェといなかと国際協力」。富士山を望む自然豊かな「いなか」で国際協力について考えよう、話そう、という内容です。

穴山町はJVC前事務局長の清水俊弘さんご夫妻がカフェ「おちゃのじかん」を営んでいる町ですが、町の人口約1500人に対して、今回のメイン会場「穴山町ふれあいホール」（公民館）の昨年の延べ利用者数が6000人を超えたほどイベント活動が活発な地域だそうです。

「いなか」からでも行動できる！

今回の参加者はJVCのスタッフ、インターンのほかにボランティアやJVCのイベント初参加の大学生など約30名。参加者が揃ったところで、自己紹介を兼ね、JVCのキャッチフレーズ「世界から中心をなくそう」になぞらえ、それぞれの「世界から○○をなくそう」を発表しました。原発・正義・思いこみなど皆さんの価値観を知ることができました。

その後は、現在の世界や難民の状況、また、都市と地方の関係などに

「犬飼農en」でじゃがいも掘り体験。犬飼さんは会社を辞めて穴山町で就農。大規模農業の一員となるのではなく、自分の目指す農業の形を求めて「犬飼農en」をお一人で切り盛りしています。

ついての清水さんの講演がありました。世の中の様々な問題について「自分ごと」として当事者意識をもち、地に足のついた行動を起こしていくのが大切というお話がとても印象的でした。

紛争や経済格差など世界の様々な問題は、自分自身とはつながりがない気がして、自分に何ができるのかとの疑問があったのですが、環境や生産過程に配慮した買い物や、JVC会員のように自分が共感する団体を支援するなど、生活のなかでできることがあるし、世界の状況に影響力をもつ「当事者」として責任感をもって暮らしていきたいと思いました。

清水さんは講演やイベントなど穴山町から様々な発信をしています（本誌319号参照）。清水さんが目指すのは、中心からではなく周辺から変えていく〝積極的周辺主義〟だとのお話も心に残りました。過疎化や高齢化が進むなかで、自分が東京以外に住む選択肢も現実的に考えるようになりました。

意識に変化が見られたのは私だけではありません。

国際協力への関わり方として、「仕事として目指す！」「専門を活かす！」「地域で関わる！」「ボランティアとして」の四テーマに分かれてのグループ・トークが行われましたが、私が参加した「専門を活かす！」では、一人の女子大生がトークのまとめに「国際協力にはいろんな参加方法があることを知りました」とコメントしたことが、今回のイベントの意義を表していたように思います。

好きでやっていればできる！

二日目の午前中は、有機農家の犬飼啓郎さんが一人で営む「犬飼農en（いぬかいのうえん）」で、じゃがいもの収穫体験をしました。この日はかなり暑くみんな汗だくで、犬飼さんに「一人での農作業は大変ですね」とお伝えしたら、「好きでやっているからできる」とおっしゃったのがとても印象的でした。

前日夜の懇親会で、犬飼さんも交えてTPP（環太平洋パートナーシップ協定）やTPPでなくても効率・利益優先の農業のあり方が招く国内外の問題が話題になったのですが、犬飼さんご自身は、利益優先で弱者に負担を強いる農業ではない有機農業を選択し実践されているのです。清水さんが講演で強調し、グループ・トークで共有された「自分のできる範囲でよりよい世界のために行動する」を体現する生き方を見た思いがします。

そこから「おちゃのじかん」に移動し、ピザ窯でのピザ作り体験とランチを楽しみました。新鮮な野菜や桃、国産小麦100％の手作りパンや、犬飼さんからの差し入れのじゃがいもの蒸し焼きなど、贅沢なランチでした。

イベントで初めて会う参加者と仲良くなったり、スタッフの新たな一面に気づけたり、国際協力だけではない色々な話ができたことで、JVCの魅力を改めて感じることができ、本当に充実した楽しい二日間でした。

「JVCに出会う週末」は今後も続いていく予定です。このイベントで、たくさんの人がJVCのさらなる魅力や国際協力への関わり方を見つけ、広げるきっかけとなってほしいと思います。ぜひ、「JVCと出会う週末」でお会いしましょう！

JVC英語ボランティアチームのメンバー。左から、フランス人のオレリア、3人おいて、竹村、ネパール人のサンジェイ、中村。写真に写っていないスウェーデン人のトマス（写真左上枠内）を加え、多国籍チームで始動した。

［報告］インターネットで世界に発信しよう

多国籍ボランティアが作った新しい英語ウェブサイト

国際的に展開するJVCの活動。ところが、その情報発信のツールであるウェブサイトは国際的ではなかった。日本語ウェブサイトは毎日更新されていたのに、海外の市民や政府機関、在日外国人のための英語サイトの更新は年に一度だけだったのだ。多忙のスタッフにそこまで割ける時間はない。そこで今年4月に立ち上がったのがJVCボランティアだった。「英語サイトはなくてはならない」。その意志がJVCの活動と世界をつなぐ。

ボランティア
竹村 謙一

国際組織には英語が必要

JVCの日本語ウェブサイトは毎日更新され、多くの情報がネット上に発信されています。それに比べ、英語サイトはJVCの年報の英語版が年に1回更新されるだけでした。多くの業務を抱えるスタッフが英語サイトまでてがけられないためです。

しかし、国際的に活動しているJVCにとって、英語で情報を発信することはとても重要です。

海外の活動地で現地の人たちや政府機関にJVCの活動内容を紹介する時に、英語サイトは無くてはなりません。また外国のNGOと連携する時にも必要となります。日本国内でも英語での情報発信は重要です。

こうした背景を知るにつけ、ボランティアの中村隆（ゆたか）さんと私は、英語サイトの刷新作業を担おうと決めたのです。

メンバーのさまざまな背景

私たちが英語ボランティアチームに関わるきっかけを紹介します。

私は某国立研究所で高圧物理学を研究していました。外国の研究者ともメールのやりとりや共同研究を通してつきあってきました。退職後も国際的な活動に関わりたいと考え、昨年度、JVCインターンとしてアフガニスタン事業のお手伝いをしました。この4月からはボランティアのチームに参加しています。

中村さんは商社の元ケニア駐在員。退職後はボランティアとして発展途上国の人たちの役に立ちたいと考え、JVCに来られました。

タイミングよく3人の外国人がチームに加わりました。一人目は

英語ボランティアチームは、どの国の人にもわかりやすい英語で情報発信することをめざしている。

Aurélia Guermont（オレリア・ゲルモン）さん。日本に住んで2年目になるフランス人です。2人の小さなお子様のお母さん、日本語も堪能です。フランスのNGOで活動していた時にも各国の人と英語で仕事をしていました。

二人目はSanjay Thapa（サンジェイ・タパ）さん。ネパール生まれで、現在ニューヨークのトリニティカレッジに通う21才の学生です。4月から3ヵ月間、日本の神田外語大学に留学。カリキュラムの一環で日本のNGOでボランティアをすることになりました。日本のマンガも大好きで、漢字も読みこなすほどの優れた日本語能力を備えています。英語はネイティブですからこれほど力強い味方はいません。

そして三人目はTomas Barre-gaard（トマス・バレゴド）さん。スウェーデンのIT関連会社に勤める若者で、日本の若者文化にひかれ、長期休暇で日本にやってきました。来日4度目です。そして改訂したばかりのJVC英語サイトを見て6月からチームに参加してくれました。

ウェブサイトは魅力的であれ

このような多彩なメンバーが週1回集まって英語サイトのリニューアルを始めました。ウェブサイトは、何よりもまず魅力的でなければなりません。ウェブサイト担当スタッフの細野さんとボランティアの曽根さんが、新しい英語サイトの枠組みを作成してくれました。

私たちはウェブサイトに必要な要素をリストアップし、優先度の高い順に日本語サイトから移し替える作業に取りかかりました。外国人が一番知りたい情報は何かをその場で知ることができたことはとても助かりました。すぐにネイティブチェックできたこともありがたいことです。

翻訳作業は楽ではありません。ふだんあまり使わない言葉、たとえば安保法制に関係した「駆け付け警護」などは、政府発表やニュース記事でどのように英訳されているかチェックする必要がありました。固有の団体や機関の正式な英語名も調べなければなりません。日本語の文章はそのまま英語に置き換えてもわかりづらいことがあります。思いきって文章を切り分け、簡潔な文にすることを心がけました。

そして何より努力したのは、簡単な英語を使うことでした。多くの国の人たちにとって英語は母国語ではありません。どの国の人たちにも、すっと読んで理解してもらえる英語を書くことはとても重要です。むずかしすぎてネイティブの人にしか通じない英語では意味がありません。

チームは、英語サイト以外にも、イベント情報、議事録、報告書などスタッフだけでは手が回らなかった資料の英訳を行っています。翻訳作業は自宅でもできる仕事です。JVCのボランティア活動に興味をお持ちで地方に在住している方、東京まで来ることが難しかった方々もメールを使って作業に参加できます。関心があればぜひご連絡ください。一緒に世界への情報発信に取り組みませんか？

イベント後半では参加者も交えて意見や悩みが共有された

イベントあらかると 出張版!

いべんと・ピックアップ!

7/15(金)・28(木)東京都・JVC東京事務所

頻発する自爆・爆破事件・暴力

～私たちは今、何をすべきなのでしょうか?～

去る7月中旬、JVC東京事務所の有志で「頻発する自爆・爆破事件・暴力 ～私たちは今、何をすべきなのでしょうか?～」を開催しました。企画発案から一週間後の開催で、洗練されていないイベントのタイトルには、JVCスタッフの不安や悩みがそのまま表れていました。

南相馬事業担当
白川 徹

自らに対する「不安」に気づく

このイベントを開くきっかけになったのは、今年7月に発生したダッカ・レストラン襲撃人質事件と、それとほぼ同時期に起こった、私たちの事業地であるイラクやアフガニスタンでの自爆攻撃事件でした。私たちJVCのスタッフは、紛争地や震災などの現場で、そしてそれを支える東京事務所においてもそれぞれの活動に日々取り組んでいます。しかし、前述の事件が発生した時、それが事務所内で話題に上ることはありませんでした。

日々の活動のなかで、私たちはいつの間にか事業を運営するだけの「支援屋」になってはいないか、世界で起こっている不公平や理不尽な暴力に鈍感になってはいないか、どこか自分と関係ない世界のことにしていないか、そうしたことで果たして有意義な活動を生み出すことができるのか――。

そのような不安を感じたスタッフ数名が、自分たちの悩みや不安も含めて話し合う場を持てないか、と話し合ったのがこの企画の始まりでした。多くのお申込みをいただき、都合2回開催しました。

イベント当日は、最初に白川から企画意図を説明し、次にアフガニスタン事業統括小野山、イラク事業担当池田、パレスチナ事業担当山村からそれぞれの問題意識を発表。後半で来場者とスタッフが車座となってディスカッションを行いました。

[アフガニスタンから]「武力」以外の手段の可能性を

小野山は、自分たちが行っている支援活動が本当に平和につながっているのか、というNGO職員にとっては最も悩ましい問題に触れました。

「かつて、別のNGOスタッフとして働いていたスリランカで、人道支援や復興活動に従事していました。『平和への呼び水』という言い方で人道支援や復興活動が盛んに行われていました。しかし、一度戦争が始まれば、そうした活動は全て吹き飛んでしまいます。本当に自分たちの活動だけで平和につながるのか、疑問に持ちました。今はJVCとしてアフガニスタンでも支援活動をしていますが、治安は悪化する一方です。もっとできることがあるのではないか、といつも考えています。

ですが、希望に思えた話もあります。かつて、JVCスタッフの母親が米軍基地付近でタクシーに乗っていたところを米軍に撃たれ重傷を負った事件がありました。当時の現地代表だった谷山博史が米軍に事件のことを『抗議』。当時のスタッフの中には、こうしたことに抗う手段は『武力』しかないと信じている者も多くいましたが、ある一人のスタッフの考えはだんだんと変化しました。彼は今もJVCで働いていますが、それとは別に『ノー・トイ・ガン・キャンペーン』というものを始めました。アフガニスタンでは、子どもたちが小さい頃からおもちゃの銃で遊ぶことが普通ですが、彼は、自分の住む地域で、『おもちゃの銃で遊ぶのをやめて平和を学ぼう』というイベントを開いて回っています。『武力』を信じていた彼が今は平和を訴えているということに、私は可能性を感じます」

[パレスチナから]「イスラム教徒だから」という偏見

ここ数年中東に関わってきた山村は、イスラム教徒に対する「イスラモフォビア(イスラム教徒への恐怖心)」に対しての危うさを語りました。

「昨今のイスラム圏で頻発する自爆攻撃による事件により、世界でイスラモフォビアが拡大しているように感じます。過激派がイスラム教やイスラム教徒を利用しているだけであって、イスラム教徒自体が過激派になりやすいわけではありません。『テロリスト』『イスラム国』という言葉がイスラム教徒への大きな偏見をもたらしている。一般のイスラム教徒からは『IS(彼らはダーイシュと呼びます)と一緒にしないでほしい』という声が多いです。

また、同じ中東圏でも状況は様々です。『中東』とひとくくりにせず、面倒かもしれませんが、一つ一つのケースをきちんと見て

2009年（前々回）アフガニスタン大統領選挙時の自爆攻撃の現場。
同国では今でも多くの事件が続いている

判断する必要があります。例えば、パレスチナ人は日々イスラエルによる人権侵害と闘っていて、ISとは直接の関係がありませんし、ISの考え方に呼応する人もほとんどいません。中には、『ISは宗教を理由にした主義を振りかざすイスラエルのあり方に近い』と言う人もいました。

イスラエルの占領下で日々暴力に曝されているパレスチナの若者が、問題解決の方法として暴力を選んでしまう事例が後を絶ちません。彼らをいかに守っていくか、暴力以外の選択肢を持てるようにしていくか、悩みながら考えていくしかありません」

また、一時帰国していたパレスチナ事務所現地代表である金子は、別の視点から語りました。

「理不尽にイスラエルの暴力にさらされているガザの人たちは『もう戦わざるをえない』と言うことがあります。私は、ただただ『戦わないで』と話します。しかし、何度も空爆され、家族や友人らを失っているガザの人たちに『戦わないで』と言っている自分を陳腐に感じる瞬間があります。もちろん、簡単に答えがでないことですがいつも悩みつづけています」

「イラクから」何を知り、誰と話すべきなのか？

イラク事業の池田は、3つのキーワード「誤解」「教育」「地方」を使って自身の悩みについて話しました。

「最初に『誤解』です。イラクの首都バグダッドで7月3日に発生した自爆攻撃による死者数は20人以上にもぼりました。直前にはダッカでの事件もあり、日本におけるイスラム社会への印象が悪くなっていることに関して、現地のイラク人の友人や仕事仲間、日本に住むイラク人に聞いたところ、ほぼ全員から「真のムスリムは平和を望む。暴力は好まない」というコメントをもらいました。例えば、私たちのパートナーNGOであるINSAN。イラク北部のキルクークという街で、彼ら自身で地域の平和作りに取り組んでいます。しかし、彼らのような取り組みが日本のメディアで取り上げられることはほとんどありません。注意して情報を得なければ、知らないうちにイスラム社会に対して誤ったイメージを持ってしまう危険性があります。

二つ目に『教育』です。イスラム社会における悲惨な出来事、その負の連鎖を止めるために何ができるのか。前述のINSANの代表であるアリー氏は『生まれついて暴力を望む人など誰もいない。その環境や教育の仕方で後天的に暴力に訴えるようになる。大切なのは教育だ』と即答してくれました。この言葉に対していますぐできることがあるのか、私には自信をもって即答、断言できる答えはありません。

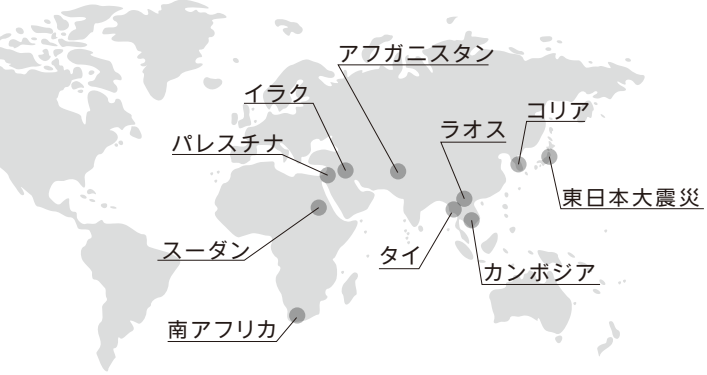
イスラム教徒の女性用民族衣装を身に着けて話す山村（写真右）

最後に『地方』。このようなイベントが実施される機会は圧倒的に都会が多いです。地方での講演では、イスラム社会への偏見からか彼らに対して否定的な発言をする方も数多くいらっしゃいました。今日のようなイベントをこそ地方でできないか、と思います。同時に、逆説的ですが、このようなイベントに参加される人の多くは、イスラム社会への偏見をもっていないのです。東京で、自分たちと同じような意見や価値観を持った人たちだけで話しをすることは、自己満足の域を超えて無いのではないか。悩みはつきません」

不安や悩みを恐れずに

後半のディスカッションでは、参加者のみなさんとご自身の悩みや不安を含めて話し合いました。会の終了時間を迎えてもなかなか議論が止まらず、話はどんどん深まっていきました。

このイベントの場において、なにかひとつの結論めいたことが発見・共有されたわけではありません。私たちJVCも、海外での支援活動に携わっているといっても、日々の仕事の中で心が鈍化して、何のために活動をしているのか分からなくなる時もあります。悩むこと、そしてそれを人と話すことも現地に向き合う大事な姿勢のひとつだと今回のイベントを通して感じましたので、JVC会員の皆さんも、共に悩んでいただければと思います。



JVCは現在、10の国・地域で活動しています。

プロジェクト一覧

6月後半～9月前半

コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

大盛況となったルンラ小学校での展示。
昨年平壌で描いた子どもたちの等身大の自画像が「里帰り」した

◎絵画交流：2016年度のともだち展開催に向け、各地域で「東アジアの空に平和をよぼう」のテーマで、平和への願いを込めた絵を描いた凧を製作するワークショップを行っている。7月には神奈川県内の小学生と、自分や友人の笑顔をモチーフに描いた凧を製作した。また8月には韓国の協力団体・オリニオッケドンム主催のキャンプにおいて、凧作りのワークショップが実施された。さらに8月末には、平壌市内のルンラ小学校、チャンギョン小学校で製作を行い、ルンラ小学校では日本から訪れた朝鮮学校の生徒とともに校庭で凧揚げをして交流を深めた。また同校では、昨年度のワークショップで製作した作品がどのように各地をつないだかを紹介する展示も行い、子どもたちの関心を集めた。

◎大学生交流：8月の絵画交流の訪朝にあわせて、日本人大学生8名が同行した。昨年に引き続き、平壌外国語大学で日本語を学ぶ学生と3日間交流し、将来成し遂げたい夢について話し合うワークショップも行った。交流後、「交流を通じて、お互いが近い国であるなぁと思った。朝日関係の改善は私たち青年にかかっていると思う」（朝鮮側学生）、「日朝関係について複雑な思いで朝鮮に来たが、平壌外大の皆さんは国と国とのつきあいではなくて人間同士だと言ってくれ、ハッと気づかされた」（日本側学生）といった感想を交わし合った。（寺西）

スーダン

紛争による避難民・難民への支援（南コルドファン州）

丸型の床板をはめ込んで完成したトイレ。まわりに草ぶきのフェンスを作成している

紛争が続く南コルドファン州の州都カドグリ周辺、及び国境を超えた南スーダン側の難民キャンプで、戦闘を逃れた避難民・難民に対する支援を実施している。

カドグリ市郊外の避難民居住区における衛生状態の悪化を予防するため、住民自身が行う戸外設置型トイレ建設を実施している。掘削後の穴の上に設置するコンクリート製の床板を設置も進めており、目標とする200基のうち半数以上がすでに完成した。子ども支援は、8月半ばまでに、避難民と地域住民が通う3幼稚園における園舎の増設工事が完了した。また、出生登録支援の啓発イベントを実施し、登録対象となる子どもの家庭訪問を開始した。

難民キャンプでは、難民自身が運営する幼稚園を支援。7月からボランティア教員への研修を実施している。（今井）

カンボジア

農村における生業改善支援／環境教育／資料・情報センター

農業チームの聞き取り調査に応じてくれたオールー村のお母さんと子どもたち

◎農村における生業改善支援：懸念された降雨開始の時期に大きなズレはなく、活動地の農家は雨季の稲作を開始した。JVCでは、今後の活動の精度向上のために、対象農家計182世帯を訪問し、野菜栽培、食品加工、水の使用状況について聞き取り調査を行った。また、活動に協力する農村出身のボランティアを対象に、堆肥作り、生態系農業、パパイヤの栽培方法の研修を行った。

◎環境教育：活動校6校の教員と共に、過去1年の活動の振り返りと、学校や学校を取り巻く地域の問題やその根本原因、解決策を考えるワークショップの時間を各々持った。また、校庭での自然観察の授業を開いた。校庭の自然状況を示す地図を作る授業は、11月まで延期し、現在は教員対象のスタディーツアーの準備を進めている。（稲垣）

パレスチナ

栄養失調予防事業／若者のレジリエンス向上事業／アドボカシー

地域保健改善のための活動アイディアを話す学校保健委員たち（東エルサレム）

◎栄養失調予防事業（ガザ地区）：1,007人の児童に合計776回の家庭訪問を実施し、母親へのカウンセリングや子どもへの栄養状態検査を行った。加えて、同期間中132回の意識改善講習会（調理実習含む）を実施し、1,517人の女性がこれに参加した。家庭訪問で出会ったムハンマド・アボアラーカム君の母親は、「カウンセリング後、子どもが食事をとってくれるようになった」と喜んでいた。

◎若者のレジリエンス・地域保健の向上事業（東エルサレム）：学校が夏休みを迎えた6月～8月には、子どもたちのサマーキャンプを実施した。参加者は6日間の活動を通し、子どもの権利や暴力への対処、ジェンダーなどについて学びながら相互交流を深めた。並行して、学校保健委員会と地域保健サポートチームの協働会議が行われ、地域改善のための活動について計画書が作られた。それぞれのチームはゴミ箱の設置や清掃キャンペーン、植樹などを予定している。

◎アドボカシー：パレスチナ人の権利回復事業で協働するNGOと情報交換の機会をもち、スタディツアーを実施した。また、日本とイスラエルによる無人航空機（ドローン）共同開発計画に関する取材に協力し、テレビ朝日系「報道ステーション」内でコメントが取り上げられた。日本では1回の講演を実施、計50人が参加した。（金子）

タイ

日・タイ経験交流／医療支援（タイ南部）

限られたスペースで行われる菜園活動

◎タイNGO若手スタッフを対象にした日本研修：11月にスタッフの日本研修を予定しているタイNGO「持続的農業財団」の活動地を訪問した。都市の学校や個人宅で家庭菜園を広める「市民農園プロジェクト」を実施しており、すでに全国各地100ヵ所以上で実践されている。鉢植えを最大限に利用して多品種を植えたり、プラスチックケースでミミズ栽培したりなど、様々な工夫により都市での野菜栽培を可能している。11月の研修では、日本でも盛んな市民農園活動のコンセプトや運営方法を学び、プロジェクトのさらなる発展に役立てることを目的としている。（下田）

◎タイ南部での医療支援活動：7月にパートナー団体のFEDを訪問。これまでの活動に関して今年度での終了と、団体同士の今後の関係継続について改めて合意した。（長谷部）

南アフリカ

HIV陽性者支援（リンポポ州）

研修はキャンプファイアの下で夜遅くまで続く。セクシュアリティについて話し合う女の子たち

6月末からはじまる学校の冬期休暇を使い、DICに通う子どもたちを対象とした研修を実施した。6月27日～7月1日にかけて行ったユース・リーダーシップ研修には、現事業地からの参加者22名を含む50名以上が参加した。7月11～16日には、環境教育・子どもの権利・セクシュアリティの3種類の研修を6日のテント生活を通じて実施、32名の子どもが参加した。DICをより円滑に運営し行く上で、子どもたちがより積極的にDICや地域での活動に参画していくことが今後期待される。

9月2・3日にはヒャンガナニ村で、10日にはボドウェ村でDICに通う子どもたちを対象とした菜園研修を実施。ボドウェでは3月に実施された研修のおさらいを含め、すでに家庭で菜園をはじめている子どもたちの様子から、苦手としている混作や水の有効活用法などについて学びを深めた。（冨田）

ラオス

農業・農村開発／土地森林保全事業（サワナケート県）

ポットに植え替えた苗を手にハイチーズ！

6月前半に開始したSRI（幼苗一本植え）の研修を引き続き行い、昨年を上回る多くの村人が実践することとなった。9月には実践者のほか関心のある未実践者も参加して、経験交流を行った。本年ラタン栽培研修を実施した5村のうち3村で育って育苗ハウスを設置し、苗をポットに移した。米銀行の活動では、13村全ての米銀行が順次米の貸し出しを行った。深井戸の活動では、引き続き持続的な管理のため修理委員会の設置や修理人の選定、修理技術研修を行った。

森林保全の活動では、2村で参加型土地利用計画の作業を進め、郡当局の承認を得て式典を開催するに至った。魚保護地区の設置では、2村で設置完了に向け規則の最終化と行政への登録を進めた。また、過去に共有林を設置した1村で規則の見直しを行い、近隣村も招いて修正版規則の発表を行った。さらに、他団体から講師を招き、スタッフと行政官向けに土地・森林に関わる法律研修を行った後、18村で研修を実施した。

現行事業の評価のための情報収集や新規事業に向けての調査などを行ったほか、大学生などの訪問を複数受け入れた。9月11日には新駐在員の山室が赴任した。（平野）

アフガニスタン

地域保健医療事業／教育支援（ナンガルハル県）／アドボカシー

蚊帳配布の際には、長老らが病気予防のアドバイスを行った

家族健康アクショングループ（FHAG）という月に一度の定期的な女性の集まりを活動地の各村において継続している。村ごとにグループとして15人ほどの女性が集まり、各人が近所で行っている家庭訪問による衛生チェックや地域で見られる保健の課題などを共有し合っている。必要な場合にはメンバー同士、またはこの集まりの世話人である女性地域保健員（CHW）が、保健衛生上の問題が見られる家庭を一緒に訪問するなど協力している。この期間は断食月のラマダーンや猛暑の日々が続く時期でもあったが欠席はほぼなく、この集まりへの関心や意欲が改めて感じられた。このFHAG活動には昨年度から文字の読み書きができる若い女性たちが参加しており、今後は彼女たちに活動記録や世話人である女性地域保健員（CHW）の補佐の役割が期待できる。

この時期、国連開発プログラム（UNDP）がマラリア対策のために蚊帳を配布することになり、活動地では約10,000張の蚊帳が各村・家庭に行き渡るよう、JVCが行政や各村の保健ボランティアである地域保健員（CHW）と協力して配布を行った。（加藤）

気仙沼

鹿折（ししおり）地区での復興支援

大盛況のうちに幕を閉じた運動会

6月19日、住民による旧浦島小学校の清掃活動が行われ、思い出の詰まった校舎を掃除した。7月24日、「第2回浦島地区大運動会」が開催され、住民など約90名が参加した。参加者は、世代を超えて玉入れや障害物競走などの競技を楽しんだ。8月11日、災害公営住宅の入居や一般住宅の再建が始まった鹿折地区市街地で「鹿折復興盆踊り大会」が開催され、仮設住宅などの一時的な居住先から戻って来る住民や新たに転居して来る住民を歓迎する式典などが行われた。

9月10日には、鹿折地区災害公営住宅で入居者同士の顔合わせを目的とした交流会を開催した。6、7月には、仮設住宅住民の心身の健康維持を目的とした「いきいき交流会」を定期的に開催し、熱中症予防に関する講話や個別の健康相談を行った。8月以降、この交流会については、地元支援団体に引き継いだ。防災集団移転のアドバイザー派遣事業では、団地内にある緑地の利用方法や集会所などに関する協議が行われた。現在、浦島地区の活性化と住民の生きがいの創出を目的としたNPO法人の設立に向けて住民有志と準備を進めている。（石原）

南相馬

仮設住宅でのサロン運営

引き続き仮設住宅4ヵ所での住民の孤立を防止するためのサロン活動と、大町復興公営住宅での自治会によるサロン活動の運営支援を実施している。これまで「避難指示解除準備区域」に指定されていた小高区の区域指定が7月に解除され、仮設住宅からの帰還が急激に進んでいるが、仮設住宅から次の住居が決まらない住民も少なからずいる。仮設サロンでは、そうした状況に詳しい管理人が住民の相談にのっている。公営団地では自治会主催の「暑気払い」を開催した。大町団地は東、西、南と3つの地域に分かれており、住民が一同に介するのはこれが初めてだった。住民約60人が参加し、カラオケ大会やビンゴゲームを通じて親交を深めた。

（白川）

イラク

心のケアプラグラムを実施

活動地のキルクーク市では、2014年6月以降多数の避難民（人口約75万人に対して避難民推定約50万人）が流入し、経済状況の悪化、支援に関する不公平感、慣習の違いなどにより、もともと多様で複雑なコミュニティの状況がさらに複雑になり、従来の対立に加え新たな対立が生じている。

7月の末以降、INSANのこれまでの活動の経験を生かし、従来の「平和ワークショップ」に心のケアを加えた「平和のひろば」を65名の子どもたちを対象として実施した。アートセッションとスポーツを通じて平和や共生について学んだ。今回は屋外での活動として、キルクーク市の北側にある遊園地でもワークショップを実施した。（池田）

調査研究・政策提言

外務省・JICAとの政策協議／各種提言

◎NGO・外務省定期協議会2016年度第一回（7月28日）：谷山、高橋、渡辺が参加。
◎NGO-JICA協議会2016年度第一回（6月24日）：長谷部が参加。また、同第二回（9月5日）：長谷部が参加。
◎第62回財務省・NGO定期協議会（6月24日）：高橋、渡辺が参加。また、同第63回（9月15日）に高橋が参加。
◎第17回外務省・JICA・NGOプロサバンナ意見交換回（7月21日）に渡辺が参加。
◎渡辺がモザンビークでの現地調査を7月と9月に実施。（渡辺）

◎注1：http://ngo-jvc.info/2dRzsCg（外務省サイト）
◎注2：http://ngo-jvc.info/2dollvL（EUサイト）
◎注3：http://ngo-jvc.info/2dOAqv4（JVC公式サイト）
◎注4：http://ngo-jvc.info/2dYtoER（EUサイト）
◎注5：SDGs項目71「我々は、実施手段を含む本アジェンダ及び持続可能な開発目標とターゲットは、普遍的で、不可分、相互に関連していることを再度強調する」SDGs全文については、http://ngo-jvc.info/2db5eZh（外務省サイト）

「時代遅れ」なニューアライアンス？

調査研究・政策提言担当　高橋　清貴

今回は、この連載で取り扱っているプロサバンナ事業のような援助事業の背景にある、アフリカを対象とした新しい国際的な投資／開発政策の枠組みに関して取り上げたい。援助の現場で起きていることには、それが生み出される背景が必ずあり、私たちはそれを知る必要があるだろう。

民間投資によって貧困削減を促す枠組み

アフリカの農業開発に関して、その広大な大地を農地として活用する目的で民間投資を呼び込み農業ビジネスを活性化させる仕組みとして『食料安全保障及び栄養のためのニューアライアンス』（以下NA、注1）がある。2012年のキャンプデービッド・サミットで成立した比較的新しい政策枠組みで、「農業に関するビジネス市場」、「技術イノベーション」、「リスク管理」、「栄養」の4つの分野で民間投資を増大させ、具体的な政策行動については対象国毎にパートナーとなる国を設定して連携して開発計画を実施する、というものである。日本も当初からこのNAに参加しており、（米国とともに）モザンビークのパートナーとして94・1億円（1・18億ドル）の支援を約束している。

しかし、このNAは、農業分野への民間投資促進こそが生産性を増大させ、それによって自動的に食料および栄養不足が改善し、貧困削減が図られるという単純な推測に基づいている。また、その策定プロセスにおいても、小規模農家の参加を欠くこと、制度変更に対するリスクについての十分な検討がなかったことなどから、発表以降、世界中の市民社会や専門家がこのNAへの懸念を表明している。国連人権理事会食料への権利（前）特別報告者であるOlivier De Schutter氏も、その問題点を指摘する報告書を提出している（注2）。JVCを含む日本のNGOsもこれを踏まえ、今年5月の伊勢志摩G7サミットでもニューアライアンスの改善を求める声明を発表した（注3）。

SDGsの理念の光を政策に当てる

日本政府からは何の反応もなかったが、翌月の6月7日、欧州議会がNAに関し、環境と土地収奪に対するセーフガード対策を欠いているとして、改善を求める決議を出したのである。NA自体がG8主導で進められてきたものであり、ある意味自己批判とも言えるようなこの決議の背景には一体何があったのだろうか？

欧州議会のプレスリリース（注4）を読めば、市民社会の懸念や主張がしっかりと理解されていることがわかる。例えば、「家族型小規模農家を支えることがアフリカの飢餓に対応する最も効果的な手段」「アジアの『緑の革命』と同じ轍を踏むべきではなく、化学肥料や農薬の使用は制限されるべき」などをNAの問題として指摘しているのだ。このことを欧州議会という公的機関が認めたインパクトは小さくない。

そのなかで筆者が注目したのは、逆転とも言えるこの政策志向性の変化の背景にはSDGs（持続可能な開発のための目標）の存在があるのではないかということだ。決議を求めて欧州議会に出された報告書を読むと、最初に欧州議会がこれまで関連して賛同してきた国際条理がズラッと並べられている。その冒頭に掲げられているのがSDGsなのである。

SDGsについては、その策定段階で込められた理念を私たちがどう読み取り解釈するかが大事である。そこで筆者が着目したのは、一つ一つの目標よりも、すべてに通底する「実施手段」、項目71（注5）で指摘されている目標間の不可分性である。すなわち「政策間」の一貫性が重要ということだ。例えば、MDGsに対し政府は自国に都合のよい目標だけをつまみ食いして、「貧困削減のためには経済成長が必要だ」として大型開発事業を進め、引き起こされる環境破壊や人権侵害には目をつぶる「御都合主義」がまかり通ってしまった。それに対し、SDGsは「実施手段」で不可分性を協調することで、そうした「御都合主義」をなくし、今までとは違うやり方、持続可能な社会をつくるための新しい方法を創造することを求めているのである。

NAに戻って言えば、欧州議会は、NAを環境や人権に対する配慮を欠いている「時代遅れの産物」と見なしたということなのだろう。SDGsが報告書の冒頭に書かれている意味は、そこにある。

ある気候変動に関する会議で、今はOECD次長になっている知己の財務官僚が「日本は政策一貫性に最も遅れている国の一つである」と述懐していた。持続可能な社会のために、何を前提として政策を組み立て、配置の軸とするのか、私たち市民社会も包括的な視点から政策のあり方を考えていくべきであろう。

告知

JVC国際協力コンサート2016

12月はバッハを聴いて国際協力！

コンサート事務局　石川 朋子

JVC合唱団の夏合宿でのひとコマ。2泊3日の合宿で、合唱により磨きをかけます。

本誌22ページに掲載されている「JVCな人」をご覧いただきましたでしょうか？ 今年の指揮者、カウンターテノールであり、2004年にJVC合唱団を誕生させたお一人である青木洋也さんが登場しています。

演目は、大阪、東京公演ともに、バッハの代表曲のひとつ『クリスマス・オラトリオ』（第1・5・6部）を軸に、大阪ではバッハのモテット2曲、日本では演奏される機会が少ないスヴェーリンク（1562年生まれ、オランダの作曲家、オルガニスト）のアカペラの曲をお届けします。大阪の合唱団コードリベット・コールの合唱を存分にお楽しみいただける選曲です。東京では、バッハの『マニフィカト』を演奏します。こちらは、合唱・アリアの多彩な構成と、金管・木管・ティンパニを含む色彩豊かな管弦楽により、壮大な賛美の音楽となっています。

昨年のアンケートに「年末の恒例鑑賞化しており、世界平和を願う気持が新たになる事と、無事一年を過ごせた事に感謝ができる場となっています」と、ありました。主催者冥利に尽きるメッセージです。「聴いてよかった」と言っていただける音楽をお届けし、JVCの活動地、そこに生きる人たちに思いをはせる時間にしていただければ嬉しいです。

チケット一枚の国際協力・東北支援。あなたの「一枚」、お待ちしています。

大阪公演

『クリスマス・オラトリオ』
『汝を去らしめず』
『主に向かって新しき歌を歌え』
『今日キリストがお生まれになった』
日時：2016年12月3日（土）14:00開演
場所：いずみホール

東京公演

『クリスマス・オラトリオ』
『マニフィカト』
日時：2016年12月4日（日）15:00開演
場所：昭和女子大学人見記念講堂

チケットはJVC公式サイトから購入できます

告知

第10回 国際有機農業映画祭2016

私たちの食べ物がつくられる仕組みやその思いに触れる

国際有機農業映画祭運営委員会共同代表　大野 和興

有機農業を主なテーマに内外の秀作を上映してきた国際有機農業映画祭は、今年で10回目を迎えます。JVCにはこの間、一貫して支援・協賛いただきました。今年のテーマは「未来を引きよせる」。今回の上映は7作品で、そのうち3作品は日本初公開作品です。また、10周年を記念して、有機農業運動が果たした役割を振り返りながら、これからのことを考えるシンポジウム「有機農業運動がめざしたもの、めざすもの」を開催します。シンポジウムでは基調報告を日本における有機農業運動の先達、星寛治さん（山形・百姓）にお願いし、パネリストにはアジアにおける有機農業の普及に尽力している稲葉光圀さん、若手有機農業者の関塚学さんをお招きしています。

合わせて、国際有機農業映画祭が生まれるきっかけとなった映画『食の未来』も上映いたします。ぜひお出かけください。

日時：2016年12月18日（日）9:30〜19:10
場所：武蔵大学 江古田キャンパス1号館 B1
1002シアター教室
チケット：［一般］1,500円（前売り）／2,000円（当日）
［25歳以下］500円（前売り）／1,000円（当日）
25歳以下の方は、当日証明証提示のこと。
下記公式サイトから購入できます。

公式サイト http://www.yuki-eiga.com/

イベントあらかると 7月～9月

いべんと・ピックアップ!

9/24(土)・25(日)栃木・那須塩原

JVCと出会う週末@栃木 ～食から学ぶ国際協力～

アフガニスタン事業担当　加藤 真希

参加者みなで集合写真

9月最後の週末に、栃木県那須塩原にあるアジア農村指導者養成専門学校、「アジア学院」を舞台に、今年度第2回目となる“JVCと出会う週末イベント”を実施しました。今回のテーマは「食から学ぶ国際協力」ということで、私たちが生きるために毎日いただいている“食”と国際協力活動とを、参加者とJVC職員が一緒にゆっくり考えてみるという趣旨で行いました。この週末のお天気、一日目は雨、二日目は晴れだったので、どちらの表情も楽しむことができました。

イベントの内容は参加者の自己紹介から始まって、今回の案内人・山下崇さんよりアジア学院の紹介、施設の見学、飯ごう炊飯とインド風のカレー作り、懇親会（“participant”と呼ばれるアジア学院の学生の方々数名も顔を出してくれました！）JVCカンボジア事業・山崎からのレクチャーとグループに分かれてのワークショップ、そして振り返りでした。

アジア学院のメッセージはシンプルで、心にまっすぐ伝わってきます。それは、「食べること 生きること 分ちあうこと」。この考えは、言語や宗教を超え、世界中どこの国にも通じる人間の営みの原点ではないかと思います。施設見学やお話を通して、まさにここでの生活の中に学校のモットーである“ともに生きるために”を実践するための仕組みがたくさん施されており、日々責任と感謝を持って自分たちがいただく命に丁寧に向き合っていることがわかりました。他方JVCも、“すべての人々が自然と共存し、安心して共に生きられる社会をつくる”ことをビジョンとして掲げています。描いている社会の理想像は、とても重なるなぁと感じました。

ここでは、ふと会話が止んで静かになるときに耳に入るのは車の音ではなく虫の鳴き声と風に揺れる葉っぱの音。参加者からも聞かれた意見ですが、情報に溢れた東京でいくら考えても浮かばないような、内からのアイディアや思想が、じわっと浮かんでくるような不思議な場所です。「国際協力」と言っても、突き詰めていくとやはりそれは、すべての人々が自然の恵みを享受しながら生きること、そしてそれを分かち合うことだと再確認する機会となりました。いつも自分自身が実践者、当事者であろうとする意識を持つことから始まるのだと思います。

その他の主なイベント

7/3 (日) 東京都・JVC東京事務所
国際協力活動を目指すあなたへ ～紛争地での支援現場からイラクでの活動を例に～
イラクで支援活動をしている高遠菜穂子さんを招いて、国際協力活動に携わるまでの経緯や支援内容について聞きました。

7/3 (日) 神奈川県川崎市【出展】
2016インターナショナル・フェスティバルinカワサキ
川崎市の地域のグループなどが参加／出展する国際交流関連のイベントに、クラフト雑貨の販売を中心にブース出展しました。

7/6(水) 神奈川県平塚市（東海大学 公開講座）
紛争地域の現状とNGO活動
東海大学の国際理解講座においてイラク事業担当の池田が講演しました。

7/7 (木) 東京都・JVC東京事務所
映画『ザ・トゥルー・コスト』上映会
ファストファッションの裏側を描いた映画を観ることで、普段着ている衣服について考えるきっかけを提供しました。

7/15 (金)、7/28(木) 東京都・JVC東京事務所
頻発する自爆・爆破事件・暴力 ～私たちは今、何をすべきなのでしょうか?～
7月上旬に各地で発生した爆破事件などをきっかけに、スタッフの問題意識を共有するイベントを開催しました（詳細は本誌14ページ参照）。

7/21(木) 東京都・JVC東京事務所
映画『LIGHT UP NIPPON ―日本を照らした奇跡の花火―』上映会
東日本大震災後の、東北の太平洋沿岸部で花火を打ち上げるイベントの様子を追ったドキュメンタリー映画の上映会です。

7/22 (金) 東京都台東区
忘れないよアフガニスタン ～JVC日本人職員の現地訪問報告会～
治安上の問題から普段は渡航できないアフガニスタンの事業地を4年ぶりに訪れたスタッフによる報告会です。

7/23 (土) 神奈川県海老名市【出展】
平和・国際フェスタ ハートカフェ2016
パルシステム神奈川ゆめコープが主催する平和・国際交流のイベントに、クラフト雑貨の販売を中心にブース出展しました。

7/30 (土)、31(日) 山梨県韮崎市
JVCと出会う週末@山梨 ～カフェといなかと国際協力～
JVCのスタッフとともに国際協力への関わり方を考えてもらうイベントを企画。第一弾として山梨県の穴山町で開催しました（本誌10ページ参照、第二弾は本ページ上段）。

8/20 (土) 東京都・JVC東京事務所
ChariTEAイベント 気仙沼のおちゃっこ
皆でお茶を飲みつつ談笑する、東北地方でいう“お茶っこ”を東京でも開催して、気仙沼の現状についてお話しました。

9/25 (日) 東京都武蔵野市
三鷹国際交流フェスティバル
井の頭恩賜公園で開催される、様々なブース出展やライブ演奏などが行われるイベントに、特にラオスのクラフト雑貨の販売で出展しました。

9/26 (月) 東京都台東区
『南北コリアと日本のともだち展2016』訪朝報告会
絵画展のために8月に訪れた平壌に関して、街や人々の様子、また日朝間の大学生同士の交流についても報告しました。

JVCなひと

JVC合唱団＋メサイア＝今の私

カウンターテノール／指揮者　青木洋也

写真 篠原栄治

10年以上前のある日、私がとある合唱団を指導している時に、アイネスをはじめとするJVCコンサート実行委員の方々が見学にいらっしゃいました。「私がJVC合唱団の指導者として適正か否か」を判断しに来られたのです。私は前任の指揮者よりはるかに若く、どこの馬の骨ともわからないのですから当然のことと思います。その翌年から私はJVC合唱団の指導を始め、それから10年以上が経ちました。

指導を開始した頃は私自身も経験が浅く、いろいろと手探りで進めていることもありました。経験豊富な合唱団員の方々からの叱咤激励をありがたく受け止める一方で、本当に続けていけるのかと不安になったことを、今でも昨日のことのように思い出します。しかし、団員の方々からの言葉が今の私を創り出したと言っても過言ではありません。私の合唱指導の原点はJVC合唱団にあります。本当に感謝していますし、今後もこの事を忘れることなく音楽活動を続けていきたいと思います。

私はJVC合唱団の指導をしているのみで、JVCの活動に直接携わったことはありません。あくまでJVCをサポートするためのJVCコンサートを盛り上げていくのが私の重要な仕事の一つであると考えています。そのためには何が必要か…、まず一人でも多くの方にコンサートに足を運んでもらうこと。そして音楽的に充実したコンサートにしなければなりません。そのためには、合唱団としてのレベルアップが必要です。毎回毎回の練習で、団員一人一人と共に楽しい時間を過ごし、かつ音楽的なレベルアップができるように工夫して練習を進めています。例年とは違い、今年は特に本番も振らせていただく（＝指揮をする）ので、本番に向けてどのように音楽を創造していくかということを念頭に練習しています。9月上旬に合宿も終わり、本番まであと3ヵ月となりました。これから仕上げ段階に入り、12月にどのような合唱団に成長しているか、今から楽しみでなりません。

最後に、いつかはJVCの活動の最前線を生で体験できればと思っています。よろしくお願いします！

おすすめ音楽

『光を世界へ ～Yes All Yes～』

制作・発売：サトワミュージック
曲・詞・編曲・プロデュース：ウォン・ウィンツァン
広報担当　大村 真理子

「瞑想のピアニスト」ウォン・ウィンツァンさんといえば、NHK『にっぽん紀行』のテーマやNHKスペシャル『家族の肖像』のテーマを思い浮かべる方も多いのではないでしょうか。幅広い層にファンを持つウォンさんですが、ありがたいことにJVCとの縁も非常に深く、2014年にはJVC南相馬事業支援のチャリティコンサートにご協力いただいたこともありました。

今年6月8日に発売されたウォンさんの新曲『光を世界へ ～Yes All Yes～』は、ピアニストであるウォンさん初の作詞による平和へのメッセージ・ソングです。『作曲家としては、それなりの数の曲を作りましたが、作詞ははじめての体験です。にも関わらず、5時間ほどで書き上げてしまいました。一瞬のうちに出来てしまった感覚です。「宇宙からのプレゼント」とでも言いたくなる気分です。しかし、作詞の時間としては一瞬でも、そこに至るまでにはそれなりの年月や、意識の変遷があり、積み重ねがあります。一言で言えば、それは私の社会意識、そして世界観、人間観の集積です。そしてそれを音楽的な言葉に置き換える作業を支えてくれたのはジョン・レノンの「Imagine」でした。』（ウォンさん公式ブログより）

311後の世界、戦争に近づく日本、戦争と武器産業、日本の報道の在り方、世界平和など、様々な想いが込められたこの曲は、その想い、そして願いに共感した多くのミュージシャンや関係者の手によって完成し、収益は、JVCを含む4つの国際協力NGOに寄付されます。さらに、この曲のお披露目コンサートの収益53万1269円は、JVCの熊本緊急支援活動に全額ご寄付いただきました。

混沌とした世界情勢の中で、「いのちといのちが出会って 小さないのちに連なる 愛は 世界中を めぐり続ける／憎しむことを手放し いがみ合うことも止めるよ 皆で 勇気を出せば きっと出来るさ」愛にあふれたフレーズで始まるこの曲に、勇気をもらい、励まされる方も多いでしょう。1人でも多くの方に聴いていただきたい名曲です。

CDシングル
価格：1.000円（税抜）

参加ミュージシャン…大塚まさじ，鈴木重子，及川恒平，渡辺真知子，内田達也，東京女声合唱団（TLC），The Voices of Japan（VOJA），松本花奈［ハープ］，永田真毅［ドラムス］，ウォン美音志［ギター］，ウォン・ウィンツァン［ピアノ&シンセサイザー］
Special thanks to 湯川れい子

投稿募集中

JVCや会報誌に関するご意見・ご希望をお寄せください。また、「JVCなひと」への自薦寄稿も大歓迎！ JVCの会員になったきっかけや最近の関心事、ほかの会員の皆様へ伝えたいことなど、800字以内でお送りください。そして、「いまさら聞けないQ&A」でも質問を募集中です。会員になって長いけどそういえば聞いてみたいことがあった、まだ会員になったばかりだから教えてほしいことがある等々、なんでも結構です。皆様からの投稿をお待ちしております！

投稿先
会員担当　宮西まで
メール　miyanishi@ngo-jvc.net
FAX　03-3835-0519

「夏の募金」報告

2016年「夏の募金」へご協力いただき、
ありがとうございました！　指定寄付／無指定寄付すべてを含みます。

6月23日～8月31日集計

837件　7,396,483円

募金集計

募金にご協力ありがとうございます
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指定先	期間（6～8月）
無指定	12,729,555
タイ	5,055
カンボジア	7,296,892
ラオス	685,158
南アフリカ	976,781
アフガニスタン	653,734
イラク	595,465
スーダン	1,435,556
パレスチナ	2,190,138
南タイ	10,000
コリア	159,306
東日本大震災	321,163
国内震災	303,000
熊本地震	1,722,259
みどり一本	206,946
東京管理	31,900
調査研究	297,100
コンサート	430,300
その他	515,136
合計	30,565,444

上表に「夏／冬の募金」も含みます。

ボランティア募集中

JVCでは、カレンダー発送作業やJVCコンサートの当日ボランティアを募集しております。
皆様のご参加をお待ちしております。

カレンダーボランティア

場　所：JVC東京事務所
内　容：データ入力、商品の封入、仕分け作業、商品の発送準備など
申込先：カレンダー事務局まで
03-3834-2388／hashimoto@ngo-jvc.net

コンサート当日ボランティア

日程・場所：［大阪］12月3日（土）いずみホール
［東京］12月4日（日）昭和女子大学人見記念講堂
内　容：プログラム渡し、場内案内、プレゼント受付など（東京と大阪で異なります）
申込先：コンサート事務局まで
03-3836-4108／concert@ngo-jvc.net

熊本震災支援募金報告

4月中旬に発災した熊本震災に対する
支援活動（本誌321号参照）への募金にご協力いただきましてありがとうございます。

4月～8月集計

88件　2,274,555円

人事

退職

林 真理子　ラオス事務所アドバイザー（8月31日付）
冨田 沓子　南アフリカ事務所プロジェクトマネージャー（9月30日付）
石原 靖士　気仙沼事務所震災支援担当（9月30日付）

編集後記

あっというまに下半期。4月にスタートした東京事務所インターンも折り返し地点です。ここでひとつ合同企画をしたいと広報チームのインターン3名が力を合わせ、ボランティアも呼びかけて、グローバルフェスタ(10月1-2日、東京)の食販ブースに出展。小雨の1日目は冷たい飲料の売れ行きを心配し、一転して真夏の陽気の2日目は真っ赤に日焼けしてやり遂げました。久々の食販でスタッフも手探り状態のなか、課題と展望を身をもって示してくれたインターンに感謝です。（T）

Trial&Error　トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）
2016年10月20日発行（通巻323号・年4回発行）　定価 500円（税込）

TRIAL& ERROR

JVC国際協力カレンダー

JVC 2017 CALENDAR

輝く瞳

写真家 田沼武能が見つめ続ける子どもたち

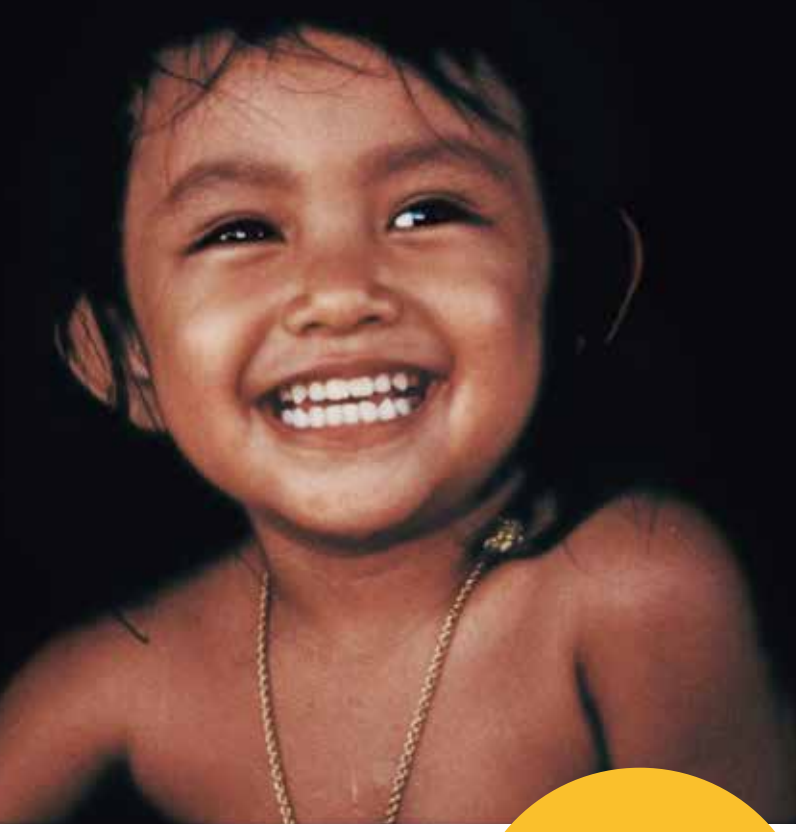
壁掛けカレンダー

卓上カレンダー

©SAWA

田沼武能

高度経済成長以前の東京や、下町の子どもたちに重点的に取り組み、苦しい状況下でもたくましく生きる人々の喜びと明るさを撮影してきた。現在もライフワークとして世界中の子どもたちを取り続ける。87歳。



JVCスマイル年賀状

今年も活動地の子どもたちが描いてくれました。

JVC国際協力カレンダー
JVCスマイル年賀状
詳細につきましては、本誌同封のチラシをご覧ください。

カレンダーの収益は、アジア・アフリカ・中東と、日本の震災被災地での支援活動で大切に使わせて頂きます。

特定非営利活動法人
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター（Japan International Volunteer Center）は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられているアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉を、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

JVCでは会員を募集しています

会員数（10月1日現在）　**合計1,045名**（正会員571名　賛助会員474名）

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。
入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。
メールアドレス　miyanishi@ngo-jvc.net

- 一般会員　10,000円
- 学生会員　5,000円
- 団体会員　30,000円

それぞれに正会員と賛助会員があります

JVCのオリエンテーション（説明会）にお越しください

JVCの活動内容をご紹介しています。
お気軽にご参加ください。［事前にご予約ください］
会　場　JVC東京事務所　参加費　無料

第1月曜日　午後7:00～8:30
第2・第4土曜日　午後2:00～3:30

ウェブサイト　http://www.ngo-jvc.net/　メールアドレス　info@ngo-jvc.net　Facebook NGOJVC　twitter @ngo_jvc

◎発行 ＝ 日本国際ボランティアセンター（JVC）〒110-8605 東京都台東区上野5-3-4 クリエイティブOne秋葉原ビル6F TEL 03-3834-2388 FAX 03-3835-0519
◎発行人 ＝ 谷山博史　◎編集人 ＝ 大野和興・長谷部貴俊　◎編集スタッフ ＝ 樫田秀樹・細野純也　◎デザイン ＝ 渡部健　◎印刷 ＝ 株式会社ベスト・プリンティング

本誌の記事・写真などの無断転載・複写を禁じます。本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」（古紙90%、間伐材パルプ10%）で作成しました。